

安城市における受託型農業の地域的展開

—高棚・桜井両営農組（部）会を事例として—

遠藤尚子

1. 研究の目的と方法

この論文は、愛知県安城市の水稲作における受託型農業の地域的展開を、農業の担い手の立場から明らかにしようと試みたものである。

安城市の農業の特色のひとつとして、水稲作中心で、各集落に一つないし二つある営農組合の組合員が農業の中心的担い手となっているということがあげられる。

営農組合は、集落の人から農地の経営を受託したり、また作業を請負うことなどで、営農組合員の経営の規模拡大をはかっている。

この安城市の水稲作における営農組合方式は、日本の農業のひとつのモデルタイプとして非常によく紹介される。が、営農組合といっても、その成立過程、組織形態、活動方法、営農組合員の経営内容は、各営農組合によって異なり、そのことが現在の状況に格差を生んでいると思われる。

そこで第一・二章では、安城市とその農業の持つ特色について述べ、第三章では、高棚営農組合を、第四章では、桜井営農部会を事例として調査した。第五章で、このふたつの営農団体の比較検討と今後の展開について述べた。

事例としてあげたこの二つの営農部（組）合はどちらも営農方式の成功例として有名であり、前向きに今後の農業の展開を考える場合、適した事例と考えられたので選びだした。

2. 考察

安城市の営農組合のあり方をみていった結果、これらの営農組合が上手に運営されるには、様々な背景が必要であったということがわかった。

営農組合の発展に必要であったと思われる点を次にあげる。

- ① 地域との密着、地域の理解・協力
- ② 安定した就業先が通勤圏内にあること
- ③ 優れた指導者がいること

④ 行政面とのタイミング・各事業の有効利用

⑤ 土地の面的集積

安城市は、名古屋・豊田・岡崎・刈谷などの工業都市へ通える範囲にあり、また、安城市も工業化が進んで、商・工・農のバランスのとれた市を目指している。混住が進んだこの市では、農業は行政面からもわりと保護されている。しかし、それらを生かしている営農組合はこの安城でも少ない。従来の機械の協同利用におわってしまっている組合もあり、一口で「安城の営農組合」は語ることはできない。

高棚営農組合は、山口伸氏を中心として高棚集落にしっかりと根づく完全協業型の法人である。

桜井営農部会は、林哲夫氏を中心として桜井農協管内の土地・作業を請負う個人経営型の部会活動をおこなっている。この全く異なるふたつの営農集団における唯一の共通点は、先に述べた五つの点を満たしていたということである。

農業は最も地域と密着した産業であり、現在にいたるまでの過程を無視して、急に方向を転換したりすると根づかず失敗することが多い。このことは安城市の営農組合経営の明暗に示されていた。この論文では二つの成功例をとりあげて、今後の安城の農業の方向を探ったわけであるが、混住が進み、特に他地域に勝る産物があるわけではないこの土地で、営農組合は、高棚型と桜井型の融合型をとってゆくとと思われる。つまり資本主義的な競争力を持った企業経営の営農集団である。この安城市の歴史と農業の歩み、そして人々の気質は、その気配をうかがわせるものがあつた。

安城の農業は、営農組合の存在なども影響して、農家は専業農家と第二種兼業農家にわかれつつある。

これからますます営農組合の展開が地域において重要な意味をもってくると思われた。